The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜文献紹介＞クリステン・ブラウン 『ニーチェと身体化 ： 職別する身体と非二元論』
Author(s)	生島, 弘子
Citation	メタフュシカ. 2006, 37, p. 109-114
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3748
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【文献紹介】
ニーチェと身体化　――識別する身体と非二元論――
（Kristen Brown: *Nietzsche and Embodiment: Discerning Bodies and Non-dualism,* State University of New York Press, 2006）

生島弘子

身体化とは何か。ニーチェ思想において身体が重要概念の一つであることは周知の通りである。例えば、「身体とは大いなる理性である」と、また、身体とは意識されているような自我ではなくそれを支配している自己と同じものであると、ツァラトゥストラは言う。このような言葉は何を語っているのか。我々がそれにおいて、またそれによって生きている身体とは、どのように形成されるのか、どのような意義があるのか。どのような身体であるかとは、どのような自己であるかと同じ問いであり、また、どのような人間類型かという問いでもある。『ニーチェと身体化』と題した本書でブラウンはニーチェ思想における身体を、また我々の身体を、どのように捉えたのだろうか。

ニーチェの著作とその思想における身体化の概念について論じるのに、ブラウンは言語の実践と物語（storytelling）を議論することから始めるのが相応しいと考える。「ニーチェにとって書くことと物語ることという行動は単に文学（literature）を創造するだけでなく、生を、実際、身体化された生を実演し（enact）創造するものでもあるということは、ニーチェの著作の多くの注釈者達の気付いていた所である。」（p.1）彼女は言語と身体とを、互いに独立的で無関係なものではなく、相互関係的な構成物であると位置付ける。それは人間の体験を探求する際にニーチェが媒体としたものが書かれた言語であると考えるからである。物語は言語によるものであり、また身体的な経験でもある。物語は身体的経験に働きかける。つまりこれは、或る社会の内で共有されている習慣が、成員の身体を、物理的な側面においても心理的な側面においても、その習慣に相応したものに形作るというようなことである。また逆に、身体的行動は物語を作り、その物語を共有されるものにもする。これは、人間が様々な出来事を実行し、その行為を意味付け、解釈し、更にその解釈が人々の間に浸透するというようなことである。

言語は伝統的には、精神と身体という互いに混じり合い得ない異なる領域の、前者に属す

るものと考えられて来た。しかしブラウンはこのような二つの領域が言語に先立ってあるのではなく、むしろ或る種の言語がこの境界画定を強化するものであると言う。本書におけるブラウンの意図は、ニーチェ思想における身体について論じながら言語についても論じること、つまり身体を言語的なものとして、言語を身体的なものとして捉えることである。

1　概要

ブラウンがニーチェ思想の特徴として挙げるのは、互いに拡張し合いまた制限し合う三つの概念、すなわち動的非二元論（dynamic non-dualism）・関係（relation）・隠喩（metaphor）である。「動的非二元論という語で私は、異なる諸次元が、特に観念形成的（ideational）次元と精神身体的（psychosomatic、心身相関的）次元と社会物理的（socio-physical）次元が、重複し合う或る領域を意味する。関係という語によっては、関係物（*relata*）の無い関係の存在を、すなわち具体的な存在物無しに諸々の関係があることを意味する。隠喩という語によっては、感覚（sensation）や像や、或るものを別のものとしてまた別のものにおいて示すような語を意味する。」（p.6）これらの概念を明らかにすることによって身体と言語がどのように論じられるか、以下に本書の展開を追う。本書が中心的に扱うのは『道徳の系譜』である。其処で身体について論じる為に、先ず自己・良心・身体罰という三つの概念が取り上げられる。これら三つはそれぞれ、観念形成的・精神身体的・社会物理的という三つの重複する次元に対応する構成物（constitution）である。本書全体の展開を概観する第一章「導入：ニーチェと身体化」以降の本論は、第二章から第六章まではそれぞれ、動的非二元論の観念形成的次元・同じく精神身体的次元・同じく社会物理的次元・関係・隠喩の説明に当たる。そして第七章と第八章は言語と言語による思考についての補説と位置付けられるだろう。

第二章「“女性的”身体へニーチェの系譜学を開く：動的非二元論と関係の所説」では、象徴的な女性的身体（symbolically feminine body）が題材とされる。象徴的な女性的身体の形成、すなわち女性または女性身体の概念の形成は、自己概念の形成と類比的であるとブラウンは考える。自己とは自己理解であるとされる。象徴的な女性的身体とは、現に女性的と思われているようなイメージや性格、特定の文化の中で伝統的に形成された女性の価値と女性の有り様のことであるとされる。このような観念形成的構成物は、精神身体的構成物や社会物理的構成物と関係しながら、自らを形成しつつ他のものを形成してもいる。自己概念の場合、それは良心と身体罰との関係において相互的に形作られる。疚しい良心は債務関係の内面的なものへの転化である。そして良心とは価値評価と関係的であり、その価値評価は、それに則ってその良心の持ち主が自己自身を評価するようなものでもあるのである。

ニーチェ思想における身体概念は男性的身体について述べるものであって女性的身体への視点が欠けているというフェミニストの主張に対して、ブラウンはニーチェの身体概念によって女性的身体を論じることは可能であると示すべく、第二章以降の論で身体について論じながら、例として女性概念を構成する事柄を取り上げる。ニーチェが女性的身体について論じていないとする主張は、身体を象徴的なものとして扱うからではないか、とブラウンは考える。象徴的な女性的

身体という観念形成的構成物は、それだけで身体の把握に充分なものではない。人間は単に心理的なものとしてだけ考えても、単に物理的なものとしてだけ考えても不充分である。身体化を論じるフェミニスト哲学者の一部には象徴としての身体において論じる傾向があったとして、ブラウンはこれを批判する。

第三章「ニーチェの禁欲主義的理想と身体化された意味の産出過程」では、禁欲主義的理想という構成物がどのように形成されるかが論じられる。そしてこれと類比されるのが PMS（pre menstrual syndrome、月経前症候群）である。これらは精神身体的次元のものである。価値評価と精神身体的構成物とは共－構成的（co-constituting）であるとブラウンは言う。身体的経験は意味付けと相互作用的であり、物理学的身体と象徴的身体とは非二元論的関係にある。このことは社会的評価が身体に書込まれるとも表現される。身体とは観念形成的・精神身体的・社会物理的という三つの次元の重複として捉えられるべき構成物であり、その把握の為にブラウンは生物学（biology）という領域を設定する。「私の言う身体という概念には生物学の含意がある。この“生物学”という語で私は社会物理的なものとしての生についての統計と諸概念とを意味する。そのような情報は感覚与件の集積に依存する。」（p.48）身体とは、感覚に与えられる心理学的・生理学的・物理学的（これらはそれぞれ三つの次元に相応するのかも知れない）な諸条件の影響を被るものであるとされる。

禁欲主義的理想とは或る価値評価である。価値評価とは価値という観念的なものと判断行為という社会的なものとのまさに中間物である。単に考えられているだけのものではなく、実際の行為として、また行為の際の規範として機能するものである。

PMS とは女性が月経前一週間に示す様々な症候である。PMS として挙げられる様々な症候は、不安・緊張・集中することが難しい・意気消沈・やたらに食べたがる・苛々する、等々であるが、しかし PMS は一定の医学的な本質が定義されているものではなく、それゆえ曖昧な概念であり、更に曖昧なままで価値評価の対象となっている。そしてそれは実際否定的な評価なのである。注意すべきは、このような症候と否定的評価は女性概念の形成にも影響を及ぼすということである。PMS に対する社会の価値評価の影響を被って、女性は自己を女性として経験し、理解し、自己の身体への価値評価を決定する。PMS は社会的な構成物である。このように言うことは、PMS が虚構されたものだと言うことではなく、PMS は社会が女性に関してより好ましいとする役割に応じて、社会が女性を位置付けているバイアスによって、すなわちその社会の道徳性（morality）の影響の下で構成されていると言うことである。

精神身体的構成物の例は、伝統的には互いに全く異なる領域であると思われてきた理念と物質（ideal / matter）、あるいは心理学と生理学という領域を互いに重なるものであるとする。

第四章「意味の産出過程としてのニーチェの禁欲主義的理想」では、社会物理的構成物としての禁欲主義的理想が取り上げられる。社会物理的なものとは、或る社会の中で習慣的に、或いは制度的に、とにかくその機能や位置付けについてそれなりの共通理解をもってなされる行為や、その行為に関わる物のことである。この章では、一般に主体と客体として二項対立的に捉えられている関係について論じられる。両者は互いに独立的にそのものとしてあり得るのではなく、他

方があることによって一方の領域が区切られるというような、非二元論的関係なのである。また禁欲主義的理想は自らの作用の内に非二元論的構造を備えてもいる。禁欲主義的理想は能動的作用でもあり、かつ、受動的作用でもある。つまりそれは、或る規範を命じるものとしては能動的作用であり、或る人によってその人に相応しい具体的内容としてそれが形成されるという点では受動的なのである。この両面は特に禁欲主義的僧侶において独特な様相を呈するとされる。彼等には禁欲主義的理想は生そのものなのである。禁欲主義的理想を持つとはその理想に相応しく行為することであり、まさにその行為することによってその理想を明らかにすることである。禁欲主義的理想が、意味であり、かつ、意味の産出過程であるとはこういうことである。禁欲主義的理想という構成物をブラウンが取り上げるのは、意味が生じる過程と構造を明らかにするのに象徴的なモデルだからである。「禁欲主義的理想は、単純な同定し得る現前の不在に直面した時、意味が創造し、また創造され、変型し、また変型されることを示して見せる。それゆえ意味は同時に主体としても客体としても、つまりそれらの曖昧さとして現れる。」（p.77）これは、何かあるべきものが無かった時、その不在について意味付けがなされるということである。その意味付けの行為は不在に迫られてでもあるし、その不在を支配することでもある。

禁欲主義的理想と呼ばれ得るものは、それぞれの人間にとってそれぞれに異なる経験として存在する。概念の不変的同一性の不可能を示す概念として、ニーチェが禁欲主義的理想を選んだのは重要な選択であるとブラウンは見なす。

第五章「悪の実践と概念についてのニーチェ」で、悪の意識つまり罪悪感は、或る人が属する社会がその人に要請する規範または生活や行動の指針にその人が達していない時にその人が抱く無能力感の現れであるとブラウンは言う。

また此処では「均一化されていない（disunified）法的主体」が取り上げられる。ニーチェの記述からは、これに対して系譜学者が肯定的な評価をしていると窺えるとする。第二論文と第三論文からブラウンは系譜学者が動的均衡（unstable equilibrium）に肯定的評価をしている姿勢を読み取る。つまり、疚しい良心の創造性についての記述はそれの肯定的評価と取れ、良き人間の両義性が肯定的に評価されているのは、それらが矛盾を孕みながら成立する、つまり対立物の競争的関係の上に構成されているものであるからであるとするのである。このような価値的偏向が動的非二元論と関係の概念を示しているとブラウンは考える。

悪の実践と悪の概念は関係的なものとして捉えられる。悪と見なされる行いと悪という概念との対応関係があるのではなく、「或る人が構成物（悪という概念、月経（前）という概念、或いは人間の主体性という概念）をどのように価値評価するかは、ニーチェについての私の分析の示す所では、その人自身とその人の属する集団にとっての、構成物の形成と経験とに構成的に関係付けられている。悪の実践についての系譜学者に深く浸透した選好は、悪の概念の形成への、また悪の概念の経験への移行を伴う。このことが関係的なものとしての悪の概念を示す。」（p.89）

第六章「ニーチェと隠喩と身体」では、隠喩について論じられる。隠喩とは字面通り、或るものの他のものへの変型である。そしてその一方と他方との関係は非二元論的である。精神と身体は二分法的に考えられるのではなく、両者の関係は隠喩という関係に置かれる。つまり両者は別々

の実在物ではなく、精神は身体の隠喩であり身体は精神の隠喩であるという関係である。ブラウンはニーチェの独自性を、単に身体を精神の優位に置いたことにではなく、身体と精神との関係を隠喩的関係に置いたことに見る。

隠喩とは言語的なものである。ブラウンは身体を「テキストを世界へ導入する場として」(p.118) 更に「隠喩を解釈しながら生成する地場として」(ibid.) 捉える。そのような身体的隠喩は誰かに解釈されることを必要とする。解釈とは翻訳 (translation) であり持越し (carrying-over) であり変型 (transforming) であり、関係という観点を必要とする。そして「身体を描写する象徴的隠喩は殆ど常に価値評価や注釈や思考を含む。それゆえ、様態としての隠喩だけが身体を解釈へと結び付けるのではなく、隠喩の主題自体がそのように結び付けているのである。」(ibid.) 身体とは隠喩であり、つまり解釈されるものであり、かつ、解釈することである。隠喩とその解釈という関係の形態が身体なのである。

第七章「ニーチェ以降のニーチェ：トラウマと言語とメルロ=ポンティの著作」では、身体と外的環境との関係を、コミュニケーションとして、すなわち問い (interrogate) と応答 (respond) として、つまり言語として見る。自己と他のものとの関係は、自己の意味付け (signify) と同時になされ、コミュニケーションとして成立するというのである。此処でブラウンはメルロ=ポンティを参照し、ニーチェとの思想的類似性を指摘する。ニーチェ思想の特徴として挙げられる非二元論・関係・隠喩は、メルロ=ポンティ思想にも類比的に見られると考えるのである。

第八章「ニーチェ以前のニーチェ：ニーチェの言説と我々の言説を前リテラシー的受容構造へと開くヘラクレイトスの言説」では、ニーチェが高く評価していたヘラクレイトスを取上げ、動的非二元論の概念が如何にしてヘラクレイトスの言説と関係していると言い得るのかを論じる。此処ではリテラシーが問題とされるが、この能力は表音文字による言語と思考の形態として注目される。そして前リテラシー的思考の形態を見せるものとして、古代ギリシャ語の中動相が注目される。

以上が本書の概要である。

2　フェミニズム

本書ではフェミニズムがしばしば言及され、例えば第二章のタイトルにも挙げられた象徴的な女性的身体のように、題材の取り方にも、ブラウンのフェミニスト的姿勢が窺える。ニーチェ思想とフェミニズムとはどのような関係にあるだろうか。フェミニズムからのアプローチとしては、例えば、ニーチェの記述に現れる女性の概念の分析、女嫌い的な彼の語り方の分析等があった。このような関係はフェミニズムの本来的な観点から結ばれていると言えるだろう。従来自明と思われて来た、語られて来た事柄が、男性の立場から語られて来た事柄だったのではないか、性別に関係無く人間一般について語られていると思われて来た事柄が男性と女性という差別的でもある二分法構造の上で語られていることだったのではないか、意識されないジェンダー構造の上に成立っていたのではないか、これがフェミニズムの問い方である。

ブラウンのフェミニズムは彼女のニーチェ研究とどのように関わっているだろうか。ニーチェ

の身体概念によって女性的身体を論じることは、フェミニズムの実践の為にニーチェの論を用いることである。これはニーチェ解釈の有用性を示し、そしてニーチェ思想に対するフェミニズムからの批判に答えるものともなるだろう。ニーチェが女性的身体について論じていないということは、ニーチェ思想によってはそれを論じることが出来ないということとは限らない。

女性的身体が主題とされ得るなら、同様に男性的身体もその形成を論じることが出来るだろう。この互いに互いから自らを区別する両者の、境界となっている差異についてはブラウンは余り言及していない。だがこの性差という構成物もまた、ブラウンが生物学と呼んだ領域で捉えられるべきものであろう。ブラウンは男性的身体について論じないが、女性概念について論じられたのと同様に、男性概念もまた、観念形成的・精神身体的・社会物理的構成物として考えられる筈である。其処で性差という構成物の構造が理解されるならば、身体一般と性差との関係もまた新たに捉えられることが出来るだろう。

３　身体と言語

ニーチェ思想を動的非二元論・関係・隠喩という点から考えることで、身体と言語ひいては思考について論じることになるというのが本書におけるブラウンの議論である。三つの概念を軸とした展開から見えて来るのは、ニーチェが取り組み、また我々がニーチェを理解する際に取り組まねばならない困難の一つは、独立的な個物すなわち不変のもの・固定的なものを信仰せずに考え語るという困難だということである。

身体化とは、身体が問いと応答の関係として形成されていることである。或る身体は、それ自体として独立的な何らかの固定したものではない。また、身体が言語的なものであるという、また逆に言語が身体的なものであるという、この位置付けは興味深い。ブラウンの言語についての論述は、身体と言語とがその形成の点で類比的であるという見方を開く。これは身体についての論述を言語にも応用することを可能にする。言語においては語と意味の関係は非二元論的であり、言語はそれ自体が関係であり、解釈の対象であり、かつ解釈であるようなものである。

ブラウンが本書の最初に言及した生の実演の為の物語とは、本書全体で論じられた身体的なもの或いは言語的なものである。例えば禁欲主義的理想、PMS、これらはそれぞれ物語と言える。そして物語を創造することは、隠喩を創造することであるだろう。身体について論じることは、自己自身について語ることであり、自らを解釈することである。そして語られた内容にではなく、その行為自体においてこそ、自己自身を呈示しているのである。

（いくしまひろこ　現代思想文化学・博士後期課程）

「キーワード」
身体、言語、フェミニズム